



「ジュエリー文化史研究会」応募動機

歴史は塗り替えられている。(4-1)

ジュエリー文化史研究会が始まることを知り、ぜひとも夫婦で傍聴させていただきたいと応募動機を綴りましたので、審査をお願いいたします。

僕はジュエリーに関する資格は何も持っていません。また、専門的な勉強は何一つしておりませんが、これまでずっとヒトの心のあり方について、興味と関心を持つており、その中でもヒトの心を結ぶ宝飾品について、人一倍の関心を寄せています。

日頃はもっぱら好きな音楽に明け暮れています。最近、歴史学者や考古学者たちの手で、これまで学んだ歴史が次々と塗り替えられていることに驚いています。

その一端を綴りますので、応募動機としてご審議ください。

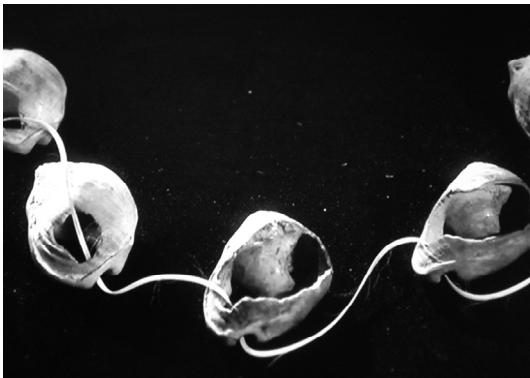
人類の初めに首飾りありき
人の祖先は装うことで
仲間達との絆を深めていった

昨年一月、NHKスペシャルで「ヒューマン」なゼヒトは人間になれたのか」を放映しました。四回にわたるシリーズもので、第一回は

「人類発祥の地アフリカ」です。番組を再現してみます。

いま世界の考古学研究者たちが、人類発祥の地アフリカで発掘作業をしています。ホモサピエンスが地球上に誕生したのは20万年前のことですが、人類の奥底に秘められている力とは何かをテーマに、南アフリカのブロンボス洞窟で発掘作業をしながら研究を重ねています。

そこで発掘されたのは、10万年前の地層から出た大きな塊です。酸化鉄を含んだ石でした。身体に色を塗るための化粧道具です。周辺から多数の巻貝の貝殻が出土しました。1センチの貝殻に規則正しく穴が開けられ、ひもが通されています。



人類最古の首飾りです。人類の誕生に最も古い証拠が見つかったわけです。

NHKの取材班は現代に通じる手がかりを求めてアフリカに飛びました。アフリカ中央部ナミビアのカラハリ砂漠に住むサンという原住民です。彼らも巻貝を集めて首飾りをつけ、親から子へ、親族同士で絆を深めて暮らしています。首飾りを作るのは大事な日課のひとつになっていました。

10万年以上の遙かな昔、私たちの祖先はおしゃれに勤しんでいたのです。顔に色を塗り、首飾りをつけていました。それは自分を飾りたいだけでなく、仲間との絆を深め、集団

ブロンボス洞窟で発掘された10万年前の巻貝。一個の直径が約一センチの大きさで、規則的に穴が開いている。穴にひもが通され、首飾りとして自分の存在を明らかにするために作られた。(写真・NHK)





「ジュエリー文化史研究会」応募動機

歴史は塗り替えられている。(4-2)

で協力体制を作るためのもの、いわば仲間たちとのアイデンティティを示すものでした。

おしゃれは当時の人々が、仲間と協力する心を大切にしたい証拠であると報じています。

人類が地球上に誕生した20万年前、人類の奥底に秘められている力とは何かを探るNHKスペシャルの番組は、ひとつの示唆を与えてくれます。

僕はこれまで「はじめに言葉ありき」と新約聖書ヨハネ伝第一章の言葉を信じていました。ギリシャ哲学のはじめにロゴス（言語）があり、



首飾りは親から子へ、また親族同士で交歓し絆を深めていた。（写真・NHK）

やがてパトス（感情）が生まれ、エトス（理性）でヒトの心はつながり、人々は絆を深めていったと考えていましたが、それより遙か昔、私たちの祖先は「はじめに首飾りありき」で自分を飾り、仲間との絆を深めていたと明らかにしています。

この番組はやがてNHKスペシャル取材班の手で単行本「ヒューマンなぜヒトは人間になったのか」（角川書店刊）として出版されましたが、その中で、専任ディレクター浅井健博さんは次のように述べています。

「最初のうち、おしゃれの道具というのは生活《非》必需品だと思っていた。それがなくても生きていく上では支障がない。一種の贅沢品だと思っていたのだ。現代なら《夫が無駄だと思ふ妻の出費》の上位には必ず高級化粧品がランクされる。その始まりという印象だった。（中略）だが、おしゃれの道具はどうやら、思いがけないことではあるが、生活必需品だったようだ。それは、ただ自分を飾るというものではなく、生きるために欠かすことのできないものだった可能性があるのだ。分ち合いと協力という、必需の関係を築くために……。おしゃれのための道具は『たかがおしゃれ、されどお

しゃれ』というべきだろう」

この浅井ディレクターのコメントは、放送された番組の中では紹介されませんでした。これは注目に値する発言です。特筆モノです。

資生堂の福原名譽会長が聞いたら、または海外の伝統的なブランドジュエリーの経営者たちが聞いたなら、膝を叩いて喜ぶでしょう。

NHK「ヒューマンなぜヒトは人間になったのか」取材班は、映像とともにこのことを明らかにしました。

西洋の流れは上から下へ 日本の流れは下から上へ

これまで露木先生はJC誌に「近世日本宝飾文化史」を連載しています。日本人がどのようにしておしゃれの道具を身に付けたか。それが人々の生活にどんなココロの豊かさをもたらしただか。豊富なご自身のコレクションと学術資料を駆使した渾身の執筆です。

ボクは長年親しくさせていただき、現在は国立西洋美術館館長である青柳正則先生に毎号お送りしています。先生は一九九三年、ポンペイ遺跡発





「ジュエリー文化史研究会」応募動機

歴史は塗り替えられている。(4-3)

掘の中から「皇帝たちの都ローマ」を出版して一躍脚光を浴びた元東京大学副学長で、JC誌の露木先生の連載を「日本人の文化史に残る労作である」と高く評価をしてくれました。先生との会話の一部を綴ります。「西洋の宝飾文化が王室から庶民に広まっていった上から下への流れとして栄えたのに比べ、日本の宝飾文化は、庶民の間から広まって下から上へに流れている。これがとてもいい」

歴史を輪切りにして眺める。

これまで何一つ系統立てた学問をしたことがない僕は、常に世の中を斜に構えて眺めています。そのひとつが歴史を観る眼です。それぞれ縦に流れた歴史を、同時代のほかの国の歴史や文化の流れと比較して、輪切りにして眺めることが好きです。

ジュエリー文化史研究会の第一回のテーマが「江戸後期の装身具」とあり、ワクワクしながら傍聴させていただきたいと願っています。

一七五〇年～一八五〇年の一世紀はさまざまな意味で人々の生活文化に大きな影響を与えました。

西洋では産業革命を中心とした激

動の時代、イギリスではジョージ三世から四世へ、フランスではナポレオン一世が頂点に立ち、ジュエリーなどの宝飾品の動きは、すべてが王族や皇帝などから庶民へ、上から下への流れでした。

音楽の世界でも同じです。

宮廷や法王に守られたバッハをはじめとする古典派音楽が、やがてモーツァルト、ベートーヴェンなどのロマン派の音楽家たちに受け継がれますが、流れは上から下へ、庶民はそれを享受していました。

一方、日本はどうでしょうか。

鎖国のさながらとはいえ、江戸時代の庶民は元氣そのものでした。徳川家やさまざまな幕府の動きに屈することなく、文化に対する熱い思いはひたすら継続していました。宝飾品の動きは、金銀、蒔絵などに対する禁止令の狭間をくぐり、櫛、簪、筥などの装身具が花開きました。

江戸の文化の流れが、一気に開いたのは歌舞伎であることは間違いないでしょう。河原乞食に始まった歌舞伎は、江戸庶民の唯一の娯楽であり人々の話題の中心でした。江戸の丸本物の義太夫狂言、黙阿弥の世話物狂言、大阪の近松門左衛門の浄瑠

璃は、東の荒事、西の和事として、熱狂的な歓迎を受けています。

浮世絵の世界もそうです。喜多川歌麿の美人画が幕府の禁止令をくぐって人々に支持されたことや、北斎、広重、写楽の作品が人気を呼びました。特に華やかな元禄時代の文化は、落語や講談、俳諧や洒落本など、幕府の思惑とは裏腹に、人々を大いに湧かせ、熱狂させました。

これを西洋と比較してみると面白い。モーツァルトの三大オペラ「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」「ドン・ジョヴァンニ」が、まったく同時期に、皇帝たちの思惑とかけ離れて、ヨーロッパ各地で熱狂的に人気を呼んだ年代と一致するのは、不思議な現象です。

文化とはカルチュア、語源をただすまでもなく耕すという意味です。

人々の思いは為政者の手を離れ、街のいたるところで人々に耕され、人気を呼んでいます。それがほんものの文化だろうと思います。人々の暮らしの中に、どっぷりと浸透しているからです。

上から押さえつければ、その反動が現れるのは自明の理です。江戸三百年の鎖国が生んだ文化の爛熟は、





「ジュエリー文化史研究会」応募動機

歴史は塗り替えられている。(4-4)

世界に眼を転じて、これほど一気に花開いた歴史は他には見当たらないと思います。

すべての流れは下から上へです。

ヨーロッパと日本をとりあげて比較をしてみました、それ以外の国々では、どうだったのでしょうか。先頃開催された露木宏監修の『聖なる銀』に痛く感動しました。

古代ローマ帝国の金崇拜よりも、聖なる銀の方に魅力を感じるの、それが庶民の暮らしに密着しているからではないでしょうか。

「古来、人々は銀を金と同じく貴金属、すなわち尊い金属として珍重してきた。ヨーロッパ中世の錬金術では、金は太陽、銀は月を意味する記号で表わされ、神聖な輝きをもつものと考えられていた。イスラム文化圏でも、銀は月の光にたとえられ、魂を浄化する、聖なる金属とされた」

これは『聖なる銀』の図録の巻頭言として、露木先生が綴った文章です。僕などは庶民の端くれだから、金のAランクよりも、Bランクの銀に魅力を感じています。

人々の普通感覚、自然の感情の現れだと思っからです。

同じ視点で宝飾文化が、先進国とされるヨーロッパの流れよりも、アジア、アフリカ、中南米の人々がどのような装身具を身に付け、人々の絆を深めているのかに興味があります。

露木先生が現在取り組んでいる織研新聞社刊の仮題『世界の銀の装身具』三連作に期待を寄せ、大いなる関心を持っていることもお伝えしたいと思います。

晴れた日に田んぼを耕し、雨の日は家の中のんびりと休む『晴耕雨読』を座右の銘にしている僕は、この言葉が気に入っているのですが、人々の暮らしの中で、どうやって文化が花開いているのかを学ぶという命題は、とても大切なことです。

巻頭でお伝えしたように、聖書が出来るそれより遙か昔、私たちの祖先は「はじめに首飾りありき」で自分を飾り、仲間との絆を深めていました。言い換えれば『なぜヒトは人間になれたのか』は「はじめに装いありき」で始まったと言っているかもしれません。資生堂の宣伝でもジュエリー業者の肩を持つ者ではありません。

ません。

日本ではあまり話題にされませんが、世界的なベストセラーになっているジャレッド・ダイヤモンド博士の『銃・鉄・病原菌』の中にこんな記述があります。

「人類文明の盛衰は自然環境に依存している。しかし今、人類は地球の自然環境に大きなダメージを与え続けている。大気汚染、温暖化、エネルギーや食料の浪費がこのまま続けば、過去の文明のように現代の文明も消滅するのではないか」

ダイヤモンド博士は「危機を乗り越えるには、過去の歴史に学ぶしかない」と警告を発しています。

付け加えておけば博士は、次の著作『文明崩壊』の中で欧米各国がどんどん進化する中、日本は江戸時代に鎖国をやり、国内の樹木に対して伐採禁止令を発令したが、明治以降の日本の文明を飛躍的に進化させた」と記しています。

生意気ですが、これから始まる露木先生のジュエリー文化史研究会の傍聴者として『資格審査中』の身分で結構ですので、ぜひとも参加させていただければ幸いです。

